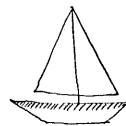


な「ふるさとの家」を建ててみました。それは、「ふるさと  
の土」が恋しいからです。土には心のいいいがあるから  
です。大自然の土を踏んでいると、草原に腰をおろしてい  
ると、空をながめていると、心が大きくなってきます。  
ここに自然の愛があると思っただのです。

鉢に咲く小さな花も、箱まきの野菜の葉の緑も、小さな  
土のなかからです。  
土はだまって、私たちの生命をたすけてくれています。  
土とは、どろんことは、  
ありがたいものですな。(月刊緑の新聞「土と愛」)

## おもしろかった粘土遊び

長 山 篤 子



子どもと生活を共にしていますと、子どもが引きつけら  
れるものに、私も自然に心が動いて参ります。特に面白そ  
うな表情をしていますと、「どうしてこんなに面白いんだ  
らう」と、心の中をのぞいてみたくなります。子どもはい  
ろいろなものを面白がります。この「面白がる」というこ  
とが、子どものあのエネルギーを燃えさせたせているのでし  
ょう。そして私も、あんなに「面白がる」という気持ちに  
なってみたいと思うのです。

子どもが「面白がる」場面を展開してくれる代表的なも  
のにドロンコ遊びがあります。砂場でのドロンコ、雨あが

りの庭でのドロンコ、そして粘土遊びもこの中に入って  
くと思います。

粘土遊びの場面を通してその様子を思い返してみたいと  
思います。

園庭の机の上に粘土の大きな固まり(子どもの頭大六個  
くらい)を用意しました。

- わあーやりたい。
- いれてー、わあーい。おおきいの、おおきいの。
- お水をかけて、べたべた、ぎゅー。のびた。
- うごいた、うごいた。

● 大きい、上からおとすわよ、べたん。(教師)

● わあーい、大きなおもちが落ちてきた。つくぞ、よいし

よ、わあ、このねんど力があるな！

● ばかー、おせ。おすのだ。

● 穴をあけますよ、横から水を入れて。

● おもしろいね！。(教師)

● おもしろいでしょ、おもしろいんだから。

● 両手でたたいたり、なでたり、おしたり、ちぎったり、

身体全体で楽しんでるうちに、道路作りがはじまり、ト

ンネルが出来、山が出来て、大きな粘土のかたまりはいろ

いろと変化していききました。

● またある日、子どもと一緒に粘土をしていましたら、三

人の男児が代る代る言葉を交しながらこんな歌が出来てい

きました。

● 山がありました。

● 山に木がありました。

● きのがありました。

● ひろばもありました。

● くまが出てきました。

● ひろばをひろくしました。もっともっとひろくしました。

● くまはきのこをとりに来たのです。

● ボールがころがってきました。

● くまはボールをなげました。ひろばで遊びました。

● するとさいごに大雨ふりました。ジャー、ジャー、くま

はあわてて山ににげていきました。

● どんこねんどもおもしろい。

● ほんとに、ほんとに、おもしろい。

● そして最後に三人の男児は「あはは……」と顔を見合

せて笑い、また粘土に挑戦していくのです。

● 私もあー面白い、本当に面白いものだなーと粘土をひと

つかみすると、板に向ってなげつけてみるのです。

● 粘土遊びに熱中する子どもは、自分の心をたっぷりと表

現できているように思います。つくり出していく力が湧き

出ているように思います。

● 雨上りのドロンコで、日の暮れるのを忘れてカエルのエ

ルタごっこをしてきた娘、砂場のドロンコで、妹と二人で

体にドロをぬり合ってダムつくり熱中してきた息子の、

満足しきった表情をみると、ドロは、かくまでも子どもの

心を捕え、満足させてくれるものか何ともありがたい気

持ちになってきます。

しかし、こんな場面とは反対に、私の歩いてまわる保育園、幼稚園から、すっかり土粘土が無くなり、ろう粘土に変わってしまった現実を、土がセメントに変えられたあの冷たさと同じように、子どもは冷たさを肌で感じているのではないかと、残念に思っているこの頃です。一人一人の小さな箱に収められたろう粘土は、子どもの心の叫びに応えてくれるものなのでしょうか。「へび」「おだんご」を手の

## 泥



## 加藤 徳 弘

先で丸めて「おしまい」と時間をつぶしている姿の悲しさを、胸の痛む思いで見えてまわっています。「のびた」「うごいた」「力がある」「なげた」「べたべた」と失敗を気にすることなしに、ぶつかっていくことのできる土を子どもの前に、いつでも用意してあげたいものです。そして「あー面白かった」と私も子どもと一緒に溜息をつきたいものです。  
(弘前教会幼稚園)

私にとって泥というと、子どもの頃の泥んこ遊びはともかく、溝さらいのドロドロの泥を連想するのか、あまり良い響の言葉でない。やきもの作りを「火の芸術」とか「土の芸術」とか呼ぶことはあるが、「泥の芸術」という言葉はあまり耳にしない。やきものやでも九州など一部の地方で泥と呼ぶところがあるらしいが、我々には土のほうが自然に響く。

さて、やきもの作りに使う土にもいろいろあるが、作り

やすい、作りにくいということがまず問題になる。餅のようにただ粘るだけでもだめ、海辺の砂のようにバラバラでも困る。餅には形を保つための腰がないし、砂に水を含ませても可塑性にとぼしく、また乾燥すると僅かの力でくずれてしまう。粘土の粒子を拡大してみると、他の鉱物と違って極めて薄い扁平状である。よく経験することだが、板ガラスを二枚重ねあわせて間に水を入れると、ツルツルと横の動きはスムーズだが、上下に剣がそうとしても少々の